

## 9. 機能別森づくりの手法開発試験

### (1) 多摩における放置林の実態調査

新井一司・久野春子・亀谷行雄・遠竹行俊

#### 〔目的〕

スギなどの人工林の皆伐後、植林されずに放置されたままの林地（以下「放置林」という）が目につくようになってきた。この放置林は、土壌侵食などの災害の危険性が懸念されているが、その実態は、ほとんど明らかになっていない。そこで、多摩地域の放置林を踏査し、その現状、問題点を明らかにし、今後の森づくりの基礎データとすることを目的にした。

#### 〔方法〕

放置林における土砂崩れの有無を明らかにするために、台風第15号が去った2001年9月11日から2001年11月にかけて、多摩地域で放置林といわれている48地点、および造林後、シカの食害が報告されている青梅市北西部の10地点、合計58地点について、台風によって土砂災害が生じたかどうか現地踏査を行った。同時に、シカ被害について林分ごとに評価した。評価基準は、放置林分内やその周辺においてシカの食痕がほとんど見られない「シカ被害なし」、シカの食痕が見られた「シカ被害あり」、強度のシカの食害によりシダ植物のようなシカの忌避植物しかみられない「シカ被害甚大」の3段階とし、その分布図を作成した。

#### 〔結果〕

写真 - 1は、十年程度放置された林であり、樹高5m程度の木本植物で構成されており、外見上は、うまく森林に遷移しているように見える。しかし、このような放置林の林内は、写真 - 2のようにシカによる食害で、1.5m以下の下層植生が欠落している、いわゆる deer line が形成されている場合が多く見られた。加えて、高木層を形成する樹木の幹には、シカによる大きな傷が観察され、木材としては、利用できないと思われた。このような実態調査の結果、今後の森づくりに際して、シカの影響を無視できないことが明らかとなった。シカによる被害が見られた放置林の分布を図 - 1に示した。調査対象地58地点中の45地点、すなわち、78%におよぶ地点がシカの影響を受けていた。その分布は、多摩川を境に、北の地域で、シカの被害が見られ、多摩川の南の地域でシカ被害は見られなかった。多摩川の北側の地域の中には、放置林分に木本植物が生育していないという甚大な被害の地点も見られた。

2001年9月10日の台風は、図 - 2に示したように、小河内で観測史上最高の日最高降水量を記録した。この大雨の影響で、奥多摩町の林道では、写真 - 3に見られる被害が生じた。観測史上最高という記録的な大雨であったが、踏査の結果、放置林においてこれが原因と思われる土砂崩れは見られなかった。ただし、伐根の支持力が低下するとされている15年以上経過した時に土砂災害が発生することが危惧された。

以上より、伐採後、数年しか経過していない放置林は、記録的な大雨でも土砂崩れが生じていないことが明らかとなった。しかし、シカの影響と考えられる林分は、78%にもおよんでいた。これからの森づくりに際しては、まず、シカ対策が必要な放置林と不要な放置林とにタイプ分けして、各々の森づくり計画を策定することが必要である。



写真 - 1 木本が生育している放置林の外観



写真 - 2 放置林内の様子 (シカによる下層植生の欠落がみられる)

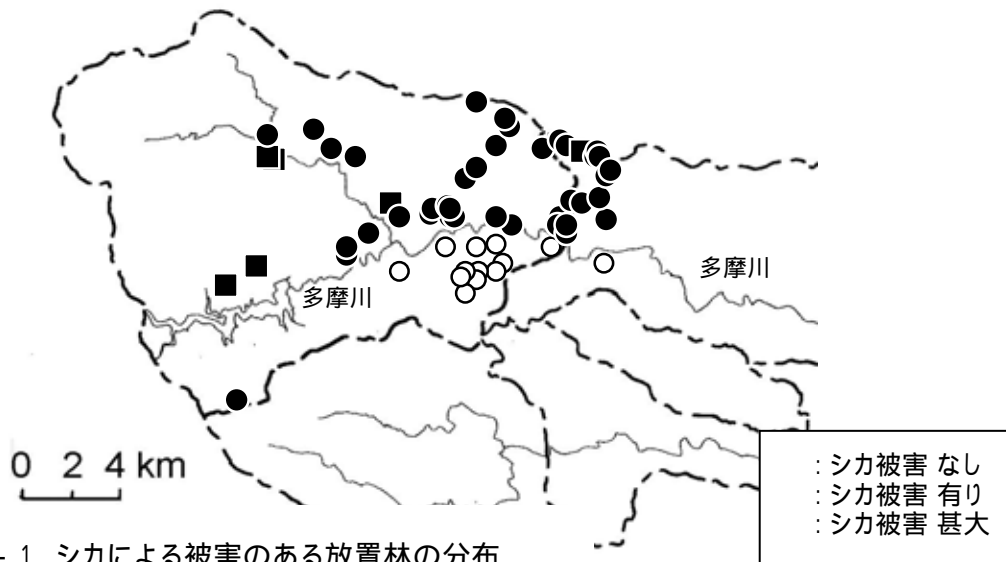


図 - 1 シカによる被害のある放置林の分布

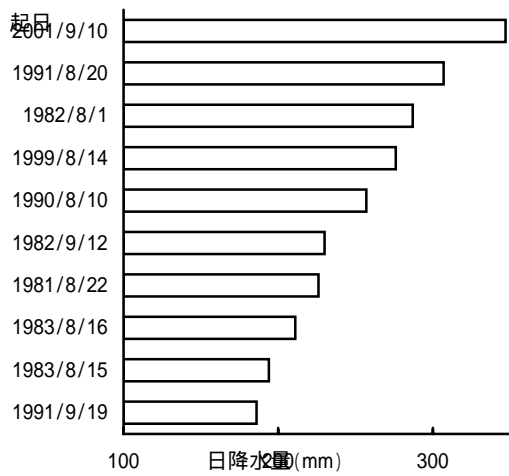


図 - 2 小河内における日最大降水量の記録 (1979 - 2001年)



写真 - 3 2001年9月10日の台風第15号による奥多摩の林道の被害